

『和泉式部日記』における「ふるさと」試論

加藤 和泉

はじめに

故郷を失った〈女〉が、「ふるさと」ということばを用いる時、それはどのような場所を示しているのだろうか。和泉式部は、夫がいながらさまざまな男と浮名を流し、それが原因で父親から勘当された、まさに故郷を失った〈女〉である。

『和泉式部日記』を見てみると、故郷という意味では用いられていないものの、〈女〉の「ふるさと」が描写される場面が二例見受けられる。それらは、「ふるさと」という語が喚起する

- ① 古びて荒れた里。昔、都などのあった土地。
- ② 昔なじみの、なつかしい里。
- ③ 生まれ育った家。また、その土地。
- ④ かつて住んだ所。長年暮らした家。
- ⑤ (旅などに出て) 後に残してきた我が家。

(『岩波古語辞典』)

の中の、②、④の意味を当てはめて「読む」ことが出来る。故郷のない和泉式部は、日記を「書く」という行為の中で、新たな「ふる

さと」の意味を創製していることが、『和泉式部日記』を通じてわかるのである。だが、ここで注視しなければならないのは、『日記』の冒頭で描かれる〈女〉は、「夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ明かし暮ら」しているのであって、そのように恋人の死で悲嘆に暮れる日常や家を、故郷を失った〈女〉が「ふるさと」として認識しているのかということである。

そこで、和泉式部のもうひとつのテキストである歌を見てみると、『和泉式部集』、『統集』における、歌ことばの「ふるさと」の用法が特異であることが注目できる。そこでは、住み慣れた場所や荒廃した土地、またそこで過ごした記憶を呼び込むような意味のみでは用いておらず、むしろそのような「ふるさと」という語が喚起するイメージを加工して、自身の心象を最も効果的に表す歌ことばとして用いている歌がいくつも見受けられるのだ。それを踏まえてみると、『和泉式部日記』に見られる「ふるさと」も、従来の「ふるさと」の解釈に従って「読む」ことが出来るのかという疑問が、冒頭部に提示された悲嘆に暮れる〈女〉の心象への注視とともに浮上するのである。

そこで、小論では『和泉式部日記』における「ふるさと」の意味を考えてみたい。まず、和泉式部以前の歌には、「ふるさと」はど

のような歌ことばとして用いられていたのかを押さえ、そこから和泉式部の歌集や同時代の作品の中で見られる「ふるさと」と比較し、和泉式部特有の言語としての「ふるさと」を提示してみたい。さらに、物語に「ふるさと」が登場することによって喚起される、居住地の移動の問題にこだわって考察していきたい。

一 「ふるさと」の系譜

『万葉集』を辿ってみると、「ふるさと」は古都を表す代表的な歌ことばとして機能していることがわかる。飛鳥時代には都が頻繁に移っていたため、当時の人々にとつて都の新旧を規定する語として、「ふるさと」は最も有効なことばの一つであった。さらに、過ごした土地とそこでの記憶は常に対を成して認識されることから、「ふるさと」はかつての都そのものと、そこでの記憶や経験が繋ぎとめられた歌ことばと言える²⁾。

そのように、かつての都とそこで過ごした個人の体験を詠んだ歌の例として、坂上郎女の歌をみておきたい。

故郷の明日香はあれどあをによし奈良の明日香を見らくし良
しも
〔『万葉集』・巻六・九九二〕³⁾

飛鳥で生まれた坂上郎女は、そこから奈良に移された元興寺をこの歌の中で詠い、さらに少女時代に過ごした旧都での記憶も詠み込んでいるのである。

時が進み、奈良に都が移った後も、度々都は変わっている。たと

えば、恭仁京に遷都した時に詠まれた河内の歌

故郷は遠くもあらず一重山越ゆるがからに思ひそ我がせし

〔『万葉集』・巻六・二〇三八〕

は、旧都となった平城京を回顧する歌であり、作者のその土地で過ごした追慕が詠み込まれている。

このように、遷都の折に詠まれた歌をみてみると、遷都は歴史的経験と同時に、それに伴って居住地を移す個人においても重要な経験であることがわかる。そこで詠まれた歌に表れる「ふるさと」は、遷都と人々の記憶をつなぎとめ、引き裂かれた空間を呼び込む歌ことばとして機能しているのだ⁴⁾。

そのような「ふるさと」認識は、平安歌人の歌を詠む素地にも色濃く引き継がれている。同じく遷都を例に挙げてみると、『古今集』に収められる平城天皇の歌が注目されよう。

ふるさととなりにしならのみやこにも色はかはらず花はさき
けり
〔『古今集』・春下・九〇〕

平城天皇は、先帝の桓武天皇によって京都に移った都を奈良に再遷都しようと試みるが、薬子の変によってそれは失敗に終わる。このような背景を勘案すると、平城天皇によって詠まれた「ふるさと」が、過去の都を指し示す一方で、彼の心の拠り所であるような生々しい場所としても機能していることがわかる。

こうして「ふるさと」は、かつてあった都を抽象化したことばと

して定着していくが、『古今集』では、そこに自然や情景的なイメージが付加されていることが注目できる。かつての都は、政治や文化の発展の可能性を遮断された土地であることから、荒廃のイメージが加わっていく。

君しのぶ草にやつるる **ふるさと** は松虫のねぞかなしかりける

〔古今集〕・夏・二〇〇・よみ人知らず

右の歌に詠まれるように、「ふるさと」はかつての都を指す公レベルだけでなく、個人レベルでも同様に用いられるのだ。かつて住んでいた土地、そしてそこで体験した記憶への追慕、あるいは人が住まなくなった荒れ果てた土地などが、「ふるさと」として詠み込まれていくのである。「ふるさと」は公においても、また私的な空間においても用いられる歌ことばとして、人々に浸透していく。

貫之の、

人はいさ心もしらず **ふるさと** は花ぞむかしのかにほひける

〔古今集〕・春上・四二〇

の歌は、その最も顕著な例と言えよう。貫之はこの歌に、「ふるさと」で咲いているであろう梅の「花」の「にほひ」を想像の中で嗅ぎながら、人の心の移ろいやすさを皮肉っている。貫之の描く変らない自然は、「ふるさと」への愛着から喚起されたイメージが大きいののであるが、言葉をかえて言えば、「ふるさと」という歌ことばは、人の記憶の中でのみその情景が変わらずに生き続ける象徴言語とし

て、機能しているのだ。

ところで、もうひとつ注目しておきたいのは、恋歌の中での「ふるさと」だ。そこで、『伊勢集』の冒頭部をみたい。『伊勢集』は、「日記」とは称されていないものの、平安女流日記の系譜上、女の吐露を書き収めた先駆けに位置する作品である。『伊勢集』の始めには、伊勢とかつての恋人仲平との恋歌が収められているが、その伊勢の歌に「ふるさと」が用いられていることに留意したい。

1 **ひとすまずあれたるやどをきてみればいまぞこのはは錦おりける**

をんな、いと心うきものから、あはれにおほえければ

2 なみださへしぐれにそへて **ふるさと** はもみぢのいろもこさぞまされる

とかきて、ねずみもちにつけてやりける。なが月ばかりのことなるべし。をとこもみて、かぎりなくめでけり

1 番歌は自分が訪れなくなった伊勢の家を、「ひとすまずあれたるやど」と詠む仲平の対人感覚の無神経さが表れている。だが、それに対して伊勢は、仲平の詠んだ「あれたる」に「ふる」を対峙させ、かつての恋人自身自身の住む家としての「ふるさと」の意味をも色濃く詠み込んでいる。この伊勢の返歌から伊勢の住む家は、恋人に粗雑に詠まれた「ひとすまずあれたるやど」が払拭されて、恋人と別れて涙を流す現在の情景へと変換されている。父の心配通りとなった伊勢と仲平であるが、他の女と結婚してもなお、伊勢への未練が残っている状態がこの場面では見受けられる。仲平に捨てられ

た伊勢はわが身を「かぎりなくはづかし」と思っている。仲平の訪れに際し、歌を詠み交わす伊勢の強さが表出されている。仲平は伊勢の歌のみならず、「ねずみもちにつけて」歌を返すその方法に、「かぎりなくめでけり」と、感激しているのである。伊勢の歌は、別れた男と逢瀬を重ねた家に対して、追懐を呼び起こす「ふるさと」ということばで詠み込むことで、未練を抱く男の心を捉えた返歌となっているのである。

伊勢の歌は、恋歌の中の「ふるさと」歌としても先駆をなしている。荒廃していく「ふるさと」は、恋人が訪れなくなったために荒れ果てていくというイメージに結び付けられている。伊勢の歌では、従来の歌ことば「ふるさと」の意味が捨象され、恋に連関する寂寥感、荒廃の象徴言語となっているのである。伊勢は歌人としても、また恋に生きる女としても、さらに「女がものを書く」という行為においても、和泉式部をみる上で重要なカノンとして、その存在を考慮する必要があるのである。

では、和泉式部は「ふるさと」をどのように用いているのだろうか。以上に考察してきた歌ことば「ふるさと」を踏襲しているのか、あるいはそこから新たな意味を見つけることが可能なのだろうか。まずは、和泉式部の歌集を紐解いてみたい。

二 和泉式部の歌における「ふるさと」

『和泉式部集』の正集、続集の中で、「ふるさと」を詠んだ歌は、総数六例見受けられる。以下に全用例を挙げ、それぞれの歌の意味を考えながら、その歌の中で「ふるさと」が何を指し示すのか、どの

のように表現されているのかを検討していきたい。

正集

- ① 同じ僧都の母の許に、こ内侍ともむらとともこともにうの花みしことなど、いひやりたれば
ほととぎすなきかげにても **ふるさと** のこけのかきねをいかにこふらん

- ② かへし
ふる郷の垣ねにのみぞわれはなくしでのたをさはとぶらひもせず

- ③ 675 月おもしろきに、京をおもひやりて
みるらんとおもひおこせて **ふる郷**のこよひの月をたれ眺むらん

続集

- ④ 22 ものこころうくおぼゆるころ、物に詣でて、しばしありてかへる日、おたるはしらにかきつく
すててましようき身ながらにいきたらば **故郷**人もいかに待ちみむ

- ⑤ 259 いたいたうあれたる所をながめて
かたらはんひとごゑもせずあれにけるたが **ふるさと**にきてながむらん

⑥ 雨のもり

542 ありやともとふ人なくて **ふる里** に雨のもりくるおとぞ悲しき

①と②は、和泉式部が、娘の亡くなった小式部内侍とともに、卯の花を見たときのことを、同じく子に先立たれた木幡僧都の母のもとを訪れ、語り合いながら詠み交わした歌である。①の「ほととぎす」は亡くなった娘、小式部内侍を指しており、娘が「なきかげ」に行っても、つまり冥土に行っても、「ふるさと」の苔むした垣根を、どれほど恋焦がれていることだろうということを詠んだ歌である。「ほととぎす」は、この世と冥土を往来する鳥であるということがこの歌の命となっている。②は①の歌の返しで、木幡僧都の母は和泉式部の詠んだ「ほととぎす」を、その異名である「しでのたをさ」に置換し、子に先立たれて生き残っている母の嘆きを詠んでいる。

この二首の中で、「ふるさと」は、先立った子が冥土の地から見た際のこの世のことを指しており、和泉式部と木幡僧都の母の、子を思う母の心中が表出された歌ことばと言える。本来、「ふるさと」という語は、現在自分がいない土地のことを指すことばであった。しかし、子に先立たれた母に詠まれる「ふるさと」は、その概念の逆をいう。つまり、もうこの世にいない我が子が、かつて確かに住んでいた、まさに現在自分が住んでいる場所のことを、「ふるさと」と詠み込んでいるのである。子に先立たれた母にとって、今自分が身を置いている地は、我が子が生前住んでいた「ふるさと」なのである。「ふるさと」は、過去を手繰り寄せる歌ことばであるが、子

を亡くした母においては、皮肉にも今身を置く場所そのものが子供と暮らした過去の地となっているのである。「ふるさと」は、先立たれた者に使用される時、その地が現在いる場所でありながらも、先立った者と共有した過去の場所なのである。「ふるさと」がそのような、両義の時間と空間を保有する歌ことばとして機能していることを①と②から読み解いてみたい。

③は、和泉式部が都から離れているときに詠んだ歌である。綺麗な月を眺めながら、「故郷」にいる誰かが自分のことを思いやり、その人も同じ月を眺めているのだろうかと思いを馳せて詠んだ歌である。この歌の中では、「故郷」にいない式部も、「故郷」で自分のことを思いやってくれているであろう誰かも、同じ「月」を眺めている。さらに、この歌には初句と五句目で推量の助動詞「らん」が二度用いられていることが注目できよう。初句の「見るらん」は、「故郷」にいる誰かが、自分のことを思って「月を見ているだろう」と推量しているものであり、五句目の「眺むらん」は、式部が、「故郷」で自分のことを思ってくれているその存在も不明な、不特定の人を推量して「眺めているだろうか」と詠まれたものである。つまり、実見している「月」から、この「月」を眺めている自分を想像してくれている「故郷」の誰かの存在を推し量り、さらにその不特定人物もしくは不在かもしれない人物の眺める「月」を、今度は自分が推量するという、極めて入り組んだ推量の畳みかけがなされている歌なのである。この歌は、「月」を眺めることで、遠く隔たった「故郷」で自分を思いやる不特定の人物の胸中と、その人物への思慕を可能にしている。この歌には、「故郷」から離れている人物が有する空間と、「故郷」での空間が収められているが、それぞれの場所

からある人物が「月」を「見る」、もしくは「眺める」視点があるために成立しているのである。それが、和泉式部ひとりのイメージの範疇で表現されていることが注視できる。

一方、続集においても「ふるさと」を詠んだ歌が三例見られる。④は、物詣でに出掛け、何日かそこで過ごしから帰る日に、寄り掛かっていた柱に書き付けた歌である。式部は自分の身を「すててまし」と望むように、物詣でをしたところで当初抱いていた「もの心憂」さは晴れてはおらず、むしろ我が身を消したくなっているのである。しかし、身を捨ててしまいたいと望む一方で、和泉式部の生命力は、「いきたらば」に表れている。「もし生きて帰ったならば」という仮定は、「生きて帰りたい」と望むことの裏返しであり、捨ててしまいたいと思う我が身を、この世に残留させたいという思いがあるからなのではないだろうか。物詣でへ出掛け、世俗の世界を絶とうとしても捨てきれない和泉式部の思い、またそのような自身を待ち受ける「故郷人」の存在が、捨ててしまいたいと思うような我が身をこの世に留めているのである。

⑤は、荒れ果てている所を、物思いに沈みながら眺めて詠んだ歌である。この歌で詠まれている「ふるさと」は、誰の故郷か明らかではない。しかし、和泉は今眺めている「あれたる所」に、かつて誰か「かたらはんひとごゑ」が響いていたであろう「ふるさと」を想起しているのである。人々から忘れ去られ荒れ果てた、静寂の地にいる和泉の耳には、そこに物音ひとつしなからこそ、かえって「かたらはんひとごゑ」の「音」がきこえてくるのである。誰もいない土地に今自分だけがいるという孤独が、その地にいた人々の暮らしの想像を可能にしているのである。

⑥は、雨漏りの「音」に、訪ねてくる人の物音として「空耳」し、「空耳」したことにより一層「雨のもりくるおと」が「悲し」く感じられると詠まれた歌である。自分を「ありやとも」と「とふ人」が不在であるからこそ、どのような「音」にも敏感になっていることが想像されよう。そして、それが「空耳」であるからこそ、雨の音は恋人のいない、ひとり身を知らしめる雨音として和泉式部の耳に、また「ふる里」の地に響いているのである。この歌は、和泉の「ひとり身を知る雨」が表現された歌であるが、彼女のひとり身をさらに効果的に伝えているのは、「ふる里」という歌とばが喚起する寂寥感ではないであろうか。つまり、荒れ果てて古びた「ふる里」という語が引き寄せる物悲しさによって、「雨のもりくるおと」はさらに「悲し」くデフォルメされ、和泉の心象を伝えているのである。

以上みてきたように、和泉式部が用いる「ふるさと」は、歌に詠み込まれる彼女の心象を支える、最も効果的な歌とばとして機能しているのである。①、②においては現在いる場所を、あえて「ふるさと」として詠み込むことで、子に先立たれた母の心象を浮き彫りにする歌とばであった。③は、京を離れた所で月を眺めながら、「ふる郷」を追慕する歌であるが、二つの場所にそれぞれ視点人物を設定し、それを和泉がひとりで推量するというフィクションが収められた歌である。④、⑤、⑥においては、「ふるさと」という語が喚起する背景によって、より一層和泉をめぐる不在や沈黙が際立ち、そのような中でこそ、和泉の人恋しさや、どのような音にも感知する聴覚が研ぎ澄まされているように表現されているのだ。また、この三首は、後で見る『和泉式部日記』の物語世界と共通しており、特に④においては、どこに身を置いたとしても「ふるさと」を思い

出さずにはいられない、式部の心の抛り所を見出すことができる。

それでは、ここで節をかえてみたい。『和泉式部日記』の中では、「ふるさと」はどのように表現されているのであるか。『日記』を開いてみよう。

三 『和泉式部日記』における「ふるさと」

『和泉式部日記』における「ふるさと」は二例あるが、いずれも歌の中では用いられておらず、次の二場面で見受けられる。まず、二例ともに「ふるさと」を思う主体が〈女〉であること、そして両場面とも、もと居た場所を離れることで解決されるかと思われた宮との関係が、その場所を移動することでは何も叶えられないという状況が注視される。

○石山詣で

かかるほどに八月にもなりぬれば、つれづれもなぐさめむとて、石山に詣でて、七日ばかりもあらんとて詣でぬ。宮、「久しうもなりぬるかな」とおほして、御文つかはずに、童、「ひと日まかりてさぶらひしかば、石山になん、このごろおはしますなる」と申さすれば、「さは、今日は暮れぬ、つとめてまかれ」とて、御文書かせ給ひて、たまはせて、石山に行きたれば、仏の御前にはあらで、ふるさとのみ恋しくて、「かかる歩きもひきかへたる身のありさま」と思ふに、いともの悲しうて、まめやかに仏を念じたてまつるほどに、高欄の下の方に、人のけはひのすれば、あやしうて、見下ろしたれば、この童なり。

○宮邸での新年

年かへりて、正月一日、院の拝礼に、殿ばら数をつくして参り給へり。宮もおはしますを、見まらすれば、いと若う、うつくしげにて、多くの人にすぐれ給へり。これにつけてもわが身恥づかしうおほゆ。上の御方の女房、出で居て物見ゆるに、まづそれをば見で、この人を見んと、穴をあけさわぐぞ、いとあさましきや。

暮れぬれば、ことはてて、宮人らせ給ひぬ。御送りに上達部数をつくして居給ひて、御遊びあり。いとをかしきにも、つれづれなりしふるさとまづ思ひ出でらる。(八三頁)

石山詣での場面での「ふるさと」は、〈女〉が都での「つれづれ」をなぐさめるために石山詣でに來たものの、宮のいる都を恋しく思うという気持ちが込められている。都という場所に起因して石山に場所を移したものの、〈女〉の心をなぐさめられるのは場所を移動することで解決はできないのである。仏の前に身を置いたとしても、宮に思いをよせている〈女〉、言い方をかえれば、恋を禁じる仏道に身を投じて、結局は宮との「忍ぶ恋」の日々を思い出さずにはいられない〈女〉の姿が見受けられる。また、このように「ふるさと」、また宮を思い出すきっかけとなったのは、石山寺にいる〈女〉のもとへ、宮の指示を受けて訪れる「童」の存在であった。この場面の展開が、『日記』の冒頭部を連想させ、それによって〈女〉と宮の関係に進展を促すことは、従来指摘されていることであるが、この場面における「童」の機能は、宮の指令を受けて〈女〉に文を

届ける単なる媒介者ではない。「童」の存在が、石山にいる〈女〉に、宮のいる都「ふるさと」を想起させる装置にもなっているのである。

二例目の宮邸に入ってから見られる「ふるさと」は、〈女〉が宮邸で自身に向けられた視線に「あさまし」く思うものの、宮の本来の姿を改めて確認し「いとをかし」く思う状況で用いられている。〈女〉は宮の邸に入ったことで、安心を得るはずの結末であったが、ここで〈女〉が「ふるさと」を思い出していることからわかるように、そのようなハッピーエンドとしての結末は覆されるのである。宮邸に入ったことで、〈女〉はもう宮と「忍ぶ」必要がなくなった環境を手に入れ、主人と召人という主従関係ではあるものの、二人の距離はかなり近付くはずであった。しかし、実際はそうではない「現実」が待ち受けているのだ。宮邸に入るまでの期間、〈女〉は宮の姿を何度も見ているにも関わらず、宮の邸に入ってから〈女〉が目の当たりにした宮の姿は、これまで〈女〉が見てきたどの宮の姿でもなかったのである。それは、宮を取り巻く、本来の宮の姿が〈女〉の目に提示されたと言っているように、拝賀式の中で見る宮は、「いと若う、うつくしげにて、多くの人にすぐれ給へり」とあるように、〈女〉の目にはどのような「殿ばら」よりも「すぐれ」て映っている。そこで〈女〉は、「これにつけてもわが身恥づかしうおぼゆ」と感じていたのだ。

そして、この描写に對をなすのが、〈女〉が「ふるさと」を思い出す際の表現である。式が終わった後、宮たちは管弦を催すのであるが、その様子を見ている〈女〉の心中思惟に注目したい。「御送りに上達部数をつくして居給ひて、御遊びあり。いとをかしきにも、つれづれなりしふるさとまづ思ひ出でらる。」とあり、宮の「いと

をかしき」姿を見るにつけても、「つれづれなりしふるさと」が思い返されるのである。先の、拝賀式の宮を見て、〈女〉が「これにつけてもわが身恥づかしうおぼゆ」と感じた表現と、式後の管弦の様子を見て「いとをかしきにも、つれづれなりしふるさとまづ思ひ出でらる」という表現は、對をなしており、いずれも宮の姿、宮の「遊び」を見て、〈女〉が「わが身」を「恥づかし」く、またかつて住んでいた「ふるさと」を「思ひ出」している。さらに、「わが身恥づかしうおぼゆ」、「つれづれなりしふるさとまづ思ひ出でらる」で用いられている「おぼゆ」と「らる」は自然に思い出されるという自発の意であることも注目される。このような〈女〉の自発表現の連続は、〈女〉が宮邸で宮を見たことによって、これまで二人で築いてきた「現実」とは異なる、本当の「現実」世界に所属する宮を認識し、「忍ぶ恋」の男女と、社会的存在としての宮と〈女〉を、改めて感じ入った衝撃を物語ってはいないだろうか。

では、なぜ望んで「家」から出た〈女〉が、移った先でもといった「ふるさと」を思い出してしまうのか。そして、〈女〉はどのような意味で、かつていた場所のことを「ふるさと」という語を用いて思い返しているのであろうか。〈女〉が宮との関係の進展を望んで移った新しい土地において、もといた「ふるさと」で過ごした記憶を呼び起こしているところに、この二つの場面で用いられている「ふるさと」の意味がみえてくるのではないだろうか。逆に、「ふるさと」を用いない女主人公の場合と比較してみると、その意味を手繰り寄せる糸口をつかめはしないだろうか。

例えば、『源氏物語』において、浮舟は自身の意志とは裏腹に居を転々とし、それによって運命に翻弄される女君である。そのよう

な浮舟が、「ふるさと」を用いてかつて住んだ地を思い返すことはない。それは、入水未遂後の浮舟の動向を見てみると明らかである。以下は、手習巻において横川の僧都によつて救い出された浮舟が、小野の山荘で入水前の人生を回想する場面である。

昔の山里よりは水の音もなごやかなり。造りざまゆゑある所の、木立おもしろく、前栽などもをかしく、ゆゑを尽くしたり。秋になりゆけば、空のけしきもあはれなるを、門田の稲刈るとて、所につけたるものまねびしつ、若き女どもは歌うたひ興じあへり。引板ひき鳴らす音もをかし。見し東国路のことなども思ひ出でられて。
(六一—三〇一頁)^⑧

浮舟は、かつていた宇治を「昔の山里」、幼少時代を過ごした常陸国を「見し東国路」とし、一度は捨てようとした人生を思い返すと同時に、今身を置く小野という場所を認識しようとする。ここで、浮舟が昔を思い出す際に宇治、常陸国をどちらも「ふるさと」としていいことが注目できよう。今置かれている不安定な状況で、誰よりも「ふるさと」の記憶を手繰り寄せたいはずの浮舟は、宇治や生まれ育った地である常陸国でさえも「ふるさと」としてはいないのである。つまり、浮舟にとつての心的「ふるさと」は、この段階では存在していないということが考えられる。浮舟は、かつて過ごした土地での記憶を呼び起こすことで、「現在」を認識しようという姿は見受けられるもの、もといた土地を「ふるさと」と規定するほどの感情は生じないのである。彼女は、「ふるさと」という語を用いずに、宇治や常陸国に、「昔」あるいは「見し」を付帯させ

ることで、直接体験した過去の一時点の地であることを表現しているのである。ここに、あえて「ふるさと」という語が呼び寄せる「過去」への追慕を選択しなかった、浮舟のアイデンティティが窺えな
いだろうか。

また、『狭衣物語』では、他者によつて女君の「ふるさと」が追懐されるという場面があり、注視される。この場面の考察は、井上眞弓氏の研究が先導している。^⑨

雪降りて心細げなる夕つ方、大将殿、内裏よりまかだたまふま
まに、いかにもの心細げなる故里に、幼き人何心もなく紛れ
たまふらんと思ひやられたれば、そなたさまにものしたまへる
に、思しやりつるものしく、山里の心地して、人目もまれなる
に、若宮の御乳母たちばかり端つ方にながめけるほどなり。
(卷三 二六頁)^⑩

狭衣が一条の宮に、女二の宮との子である若宮を訪ねる場面である。「故里」は、「いかにもの心細げなる故里に、幼き人何心もなく紛れたまふらん」という狭衣の心中思惟に見られる。井上氏は、

「もの心細げなるふるさと」という感懐は一条の邸を訪れた狭衣の感懐であることに違いないのだが、「ふるさと」という言葉に關しては、狭衣の「ふるさと」というよりは女二の宮や大宮にとつての「ふるさと」であり、そこで生い育つてゆく若宮にとつての「ふるさと」の意が含まれている。

と説いている。¹³この「いかにもの心細げなる故里」には、狭衣の追懐が付与されていると同時に、一条の宮という地で起きた過去の「物語」が引き寄せられているとも考えられる。狭衣が、自身の「故里」ではなくとも、その地を「故里」と呼称することで、一条の宮という地で暮らした女君たちの「故里」空間を、そしてその「故里」空間の中で生まれた若宮の運命を、この場面では呼び起こしているのである。

巻二で、大宮が娘女二の宮の懐妊を嘆き、その事態をどう切り抜けようかと苦悩する場面がある。そこで大宮は、出雲の乳母の画策で、狭衣の子を身ごもった娘の妊娠を隠し、生まれてくる子を自身の子となるよう、偽懐妊をするのである。そうして生まれた子が、若宮だ。その大宮が、実家に帰る際、一条の宮を、

久しう御覽せざりつる古里に立ち出でさせたまへるに、いたう荒れまさりても古りにける山のけしき、もの恐ろしげにて、

(巻二 二〇七頁)¹⁴

と、荒れ果てた「古里」として見ている。

先の狭衣が一条の宮を訪れた場面に戻ると、その場面の少し前には、一条の宮での様子が、

斎宮は寮へ渡らせたまひしかば、若宮はいとど人少なにも寂しくてもものしたまふを、大將殿は心苦しう思ひきこえたまへど、前斎院の御一人住みの心細きに

(巻三 一三三頁)¹⁵

と、女三の宮が斎宮になり、一条の宮に残る女一の宮と若宮の「も

の寂し」さが描かれる。また、そのような邸、女宮と若宮を親身に、「宮の内の荒れたる所々繕はせなどさせたまひて」と後見する堀川の大

臣の描写も見られる。こうした一条の宮の背景が、狭衣の心中思

惟に表れる「故里」には総括されているのである。さらに、「いかに

もの心細げなる故里」は、「山里の心地して」とあるように、狭

衣自身の感覚でこの地が捉え直されていることも注目できよう。

以上を踏まえつつ、『和泉式部日記』での「ふるさと」を再度振り返ってみよう。〈女〉が石山寺に身を置き、そして宮の邸に入

た後、それぞれもといた土地「ふるさと」を思い出していることが、

仏のもとに身を置いても解消できない宮への思いと、宮との「忍ぶ

恋」を改めて捉え直しているという意味がみえてはこないだろ

うか。ここに、この『日記』の中での宮との「忍ぶ恋」に主体的で

ある〈女〉の姿が浮かび上がる。

石山詣での場面における〈女〉の「ふるさと」は、都で「忍びて

ものへ行かん」(一三三頁)と云って〈女〉のもとを訪れた宮と過

していた空間と、心変わりの多い宮を思う日々を指している。同様

に、宮邸入り後に思い出される「ふるさと」も、宮の邸に入る前の

空間、つまりもといた自身の家で宮を思い、宮と過ごした時間なの

である。〈女〉にとつて宮と過ごした「忍ぶ恋」の空間は、そうした

関係から前進し脱却したいと「思ひ立ち」つつも、その空間を離

れた時に自らの記憶の拠り所にしてしまうような、〈女〉の内面的

矛盾を抱えた空間なのである。

〈女〉が「つれづれ」の日々を「なぐさめ」ようと石山詣でを行っ

たことと、宮の召人として邸に入つて二人の關係を落ち着かせようとしたこと。この二つの〈女〉の行動は、表面的に言えば、〈女〉の行動力によつて、「つれづれ」な日常や「忍ぶ恋」の關係を解決しようとした姿と見ることが出来る。しかし、意志的に居を移した先で、もといた場所での記憶を思い返しているという、〈女〉の行為と逆走する思惟が見えてくる。

宮と出合い、結ばれ、宮の邸に入つていく過程が描かれたこの『日記』の、目まぐるしいほどに変わる場面展開の一端に、こうした〈女〉の居を移すという主体的な行為がある。ここに、〈女〉の主体性ゆえの「生成の原理」を読み解くことができる。また逆に、鈴木一雄氏の論じる「ふたりの『忍びの恋』という性格、『忍びの恋』における帥の宮という限界を超えることはできないもの」として捉えることもできる。だが、〈女〉がもといた家で過ごした宮との「忍ぶ恋」の關係の日々を、「ふるさと」と思うことから、あくまでも宮との「忍ぶ恋」を肯定し、強調していると読むこともできるのではないだろうか。〈女〉と宮の「忍ぶ恋」の關係は、そこから進展しないという意味での「限界」なのではなく、むしろ、二人の關係は「忍ぶ恋」の上で成立していると読み解くことができるのである。

四 「ふるさと」というアイデンティティ

『和泉式部日記』に見られる、〈女〉自らの決断によつて行う「転地」¹³は、もちろんもといた地で過ごした鬱屈の脱却を図つてのことである。しかし、好転を望むがゆえに行つた「転地」で、「ふるさと」を思い出すという〈女〉の逆説的な思惟に、もといた「ふるさと」

にしか見出すことのできない〈女〉の心の基盤が表れているのである。それは、宮との「忍ぶ恋」の中で築かれた〈女〉のアイデンティティが、「ふるさと」として規定することで表出されていると言える。三田村雅子氏が〈女〉と宮の關係性について、「二人の關係が非日常的なものから、日常的なものへと変化」¹⁴したと指摘される通り、あくまでもアクシデント的に始まつた〈女〉と宮の戀の關係は、いつしか〈女〉の「ふるさと」となり、居を移した先での心の基盤となつていくことが注目できる。

『和泉式部日記』の〈女〉に、故郷はない。そのような故郷を失つた〈女〉は、『日記』の起筆部に描かれるように、心の拠り所もなく、恋人に先立たれたことを嘆いて過ごす日々を余儀なくされていたのである。だが、そこに宮との戀の關係がもたらされたことで、〈女〉は空虚であつた日々を「つれづれ」や「はかなし」といったことばで色付けながら、「ふるさと」を獲得していったのである。

「ふるさと」とは何か、という問いのこたえを和泉式部のテクストの中で探してみると、それは和泉の歌、日記に通底する「ふるさと」という語で表された、彼女の創製した記憶であり、人との關係性そのものである。故郷との關係を切断された者が、新たに「ふるさと」を見出し、宮との關係性を「ふるさと」という語で保証してみせたのが、『和泉式部日記』なのである。

註

(1) 物語の中に表れる「ふるさと」から、女の「居住地の移動の問題」を扱うことに関しては、『狭衣物語』における井上眞弓氏の研究が、小論を書くにあたり非常に示唆的であつた。井上眞弓「狭衣物語」

- における場所の記憶—今姫君と大宮の移居を中心に—」(平成16
 18年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号16520109
 研究成果報告書『狭衣物語』を中心とした平安後期言語文化圏の
 研究」(研究代表者三谷邦明、二〇〇七年二月)
- (2) 村尾誠一「ふるさと」(久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕
 大辞典』角川書店、一九九九年、五月)
- (3) 新編日本古典文学全集7『萬葉集②』(小学館、一九九五年四月)
 による。
- (4) 岡田喜久男氏は、人が「故郷を思う」ことについて、以下のよう
 に述べている。「その所に生れ・育ち・老い・死んでいく人にあっ
 ては、よほどの誘因がない限り、故郷は意識されずに終るのが自
 然である。つまり時間と空間の隔たりが、故郷を生み出すもので
 あると言えるであろう。」(岡田喜久男「古代文学における故郷
 万葉集を中心に—」(佐藤泰正編『文学における故郷』笠間書院、
 一九七八年一月)
- (5) 片桐洋一氏は「ふるさと」という歌ことばの変容について、「自
 分が過去に関わりを持ったところをいうのであるから、昔関係を
 持った女の意にもなり、自分が男に捨てられた場所の意にもなる」
 と説いており、小論の趣旨を補強する先行研究であろうと思われ
 る。(片桐洋一「歌枕歌ことば辞典」角川書店、一九八三年一月)
- (6) 藤岡忠美「伊勢集序説—伊勢日記冒頭歌覚え書き—」(『国文論叢』
 第十号、神戸大学文学部、一九八三年三月)、秋山虔「伊勢 王
 朝女流文学の誕生」(筑摩書房、一九九四年)の研究が先駆である。
 「身を知る雨」の先行研究として、平田喜信「古文教材研究講座『伊
 勢物語』を読む4 身を知る雨—『伊勢物語』と『古今集』」(『月
 刊国語教育』巻二号、東京法令出版、一九八九年四月)、針本正
 行「身を知る雨」表現史論—『古今集』・『伊勢物語』・『和泉式
 部日記』・『源氏物語』を中心として—(室伏信助編『伊勢物語の
 表現史』笠間書院、二〇〇四年十月)、谷知子「かきやりし黒髪
 恋歌への招待」フェリス女学院大学、二〇〇四年十月)などが
- (8) ある。
 三田村雅子氏のこの場面における以下の指摘は、示唆的である。
 「和泉式部日記」の前半の一つのクライマックスをなす応酬。石
 山で小舎人童の登場のしかたは日記冒頭の場面と酷似する。宮と
 女の新しい関係の出発点として石山詣での場面を位置づけるもの
 であろう。」(古賀典子・三田村雅子『紫式部日記 和泉式部日記』
 (ほるぷ出版、一九八七年七月))
- また、新井英之氏は「女」の晴れやらぬ心的状況・小舎人童の
 来訪など、酷似した枠組に設定されていることが把握される。こ
 のような類似表現から、八月記事の、冒頭の雰囲気を再現しよう
 とでもする、意識的な叙述構造が帰納できるのである」と説く。
 (新井英之「和泉式部日記」石山詣の一段をめぐって」(『日本文
 学研究38号』大東文化大学日本文学会、一九九九年二月))
- 小舎人童を中心に取上げた研究では、大谷裕明「(小舎人童)
 の出現—『和泉式部日記』を中心に—」(『日本文学誌要45』法政
 大学、一九九二年三月)が注目される。
- (9) この箇所の考察は、保坂達雄氏の授業、二〇〇八年度後期「上代
 文学演習B」において行ったものである。
- (10) 新編日本古典文学全集25『源氏物語⑥』(小学館、一九九八年四月)
 による。
- (11) 井上眞弓、註(1)に同じ。
- (12) 新編日本古典文学全集30『狭衣物語②』(小学館、二〇〇一年
 一月)による。
- (13) 註(1)に同じ。
- (14) 註(12)に同じ。
- (15) 註(12)に同じ。
- (16) 「生成の原理」という語の使用に関して、森常治氏の「生成の原
 理」(長谷川泉 高橋新太郎編『文芸用語の基礎知識』至文堂、
 一九八五年八月)、森常治訳 ケネス・パーク『動機の文法』(晶
 文社、一九八二年四月)を参照した。

(17) 鈴木一雄「解説『和泉式部日記』について」(円地文子・鈴木一雄「全講和泉式部日記」至文堂、一九六五年一月)

(18) 〈女〉が居を移すという行為に関して、あえてここで「ディアスプレースメント転地」という語を用いたのは、井上眞弓氏の「狭衣物語」の転地——飛鳥井女君／今姫君／狭衣——(狭衣物語研究会編「狭衣物語が拓く言語文化の世界」翰林書房、二〇〇八年十月)、また氏に教授されたジェイムズ・クリフォード「ルーツ」(月曜社、二〇〇二年三月)に示唆を受けたからである。井上氏がこの論の中で導いているのは、「何らかの力によって居場所を押し出され、渡り歩」き、それによって「故郷と呼ばれる場所を失う」者たちのルーツ、そしてアイデンティティである。小論では、氏の論じる「何らかの力」というものを〈女〉の意志という意で用いた。小論が「転地」という語で訴えるのは、もともと故郷のない〈女〉が、自分で居を移しておきながらも、そこで逡巡し、最終的にもといた地を「ふるさと」と意味付けているという逆説性である。

(19) 三田村雅子、註(8)に同じ。

※『和泉式部日記』の本文は、近藤みゆき訳注『和泉式部日記』(角川ソフィア文庫、二〇〇三年十二月)による。また、『和泉式部集』、『続集』、『古今集』、『伊勢集』の引用は、新編国歌大観による。

(本学博士後期課程)